



照屋 仁士 議員

病児・病後児保育の改善を

答 拡充の可能性と手法も含め検討する

問 平成27年度から始まった病児・病後児保育は、予算が増額されるほど実績が上がった。しかし、実際には利用できないとの声もある。実態はどうか。

副町長 病児病後児保育は、津嘉山にある「わんぱくクリニック」へ委託をしている。27年度延べ利用実績は、町内332人町外229人の計561人である。病院に確認したところ、予約で埋まり利用できない状況もあると報告を受けている。

問 本町の病児・病後時保育に登録している人数は何人が。

民生部長 平成27年度実績で73人となる。その登録者が複数回利用して延べ332人となっている。

問 病児・病後児保育を受けることができる対象者は何人か。この73人は対象全体の何%か。

民生部長 病児・病後児保育

の対象年齢は、0～8歳である。町内8歳までの人数は4792人である。現在の登録者73人は全体の1.5%となる。

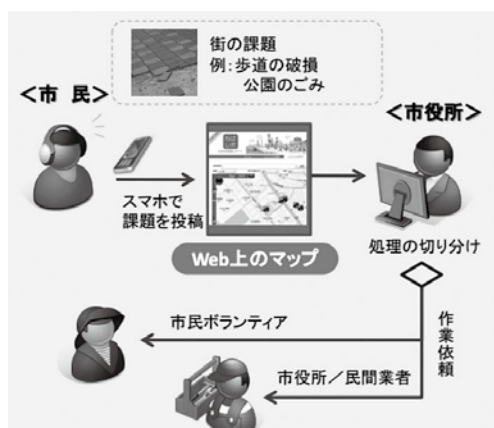
問 病児・病後児は親が面倒をみるのが大事だと思う。しかし本町は、高齢化率も低く、若者世代、子育て世代が多い。この制度は共働きの親、また他市町村から移り住んで来た者にとって、とても有益な制度である。その観点からすると、73人にしか制度が利用されていない。知らないがゆえに不利益を受けている人たちがいるとも想定される。今後、さらに広報の充実、受入れ先の確保が必要である。また利用料金1000円ほどの差で町外施設も利用できる。今後もこの制度を拡充してほしいかどうか。

副町長 町内の実施施設の拡充または、広域的な利用の可能性と手法も含め検討する。

「ちばレポ」に学び、住民参加の見える化を

問 「ちばレポ」は、千葉市が開発した住民協働の取り組みである。他市町村でも低コストでの導入・運用ができる。本町も検討してはどうか。

副町長 導入や運用など費用面も含めて調査研究していきたい。



「ちばレポ」のイメージ